

University Academic Repository

リカードウ以後の経済学の諸相：
ヒューウェル研究を通じての展望と課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-04-30 キーワード (Ja): キーワード (En): William Whewell, Cambridge Inductivists, dismal science, the British Association of the Advancement of Sciecn 作成者: 久保, 真, クボ, シン, Kubo, Shin メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/131

リカードウ以後の経済学の諸相

——ヒューウェル研究を通じての展望と課題——

On some Aspects of Political Economy in the Post-Ricardian Period:
A Survey of Recent Studies on W. Whewell

久 保 真

Shin Kubo

<要 約>

科学史と経済学史との学際的接近という近年の動向に刺激されるかたちで、ヴィクトリアン科学の泰斗であるヒューウェルに関する諸研究が経済学史家の手によって活発に行われるようになった。しかし、これらの諸研究がヒューウェルを取り上げるコンテクストは、方法論・道徳哲学・制度論・数理経済学など多岐にわたっているため、諸研究はややもするとコンテクスト間の相互関係を見落としがちのきらいがある。そのような反省に立ち、本稿では近年の諸研究のサーヴェイを通じて以下の諸点を示唆する。第一に、経済学方法論の分野では、ヒューウェルはケンブリッジ帰納主義者の領袖として扱われてきたが、近年の科学史研究に照らせば、そのような分類には無理があること。第二に、ヒューウェルの正統派経済学批判は、当時のアングリカン神学の側からする経済学へのアプローチの一類型として解釈できること。第三に、経済学の制度化に対するヒューウェルの態度の変化は、彼の方法論的立場の深化に対応したものと考えられること。第四に、ヒューウェルの数理経済学の試みは、彼自身の消極的意図のため、イギリス経済学に深く根付くことはなかったこと。最後に、ヒューウェルはリカードウ以後の大空位時代の時代精神を象徴する人物であったこと、である。

<キーワード>

ヒューウェル William Whewell、科学史としての経済学史、経済学方法論、ケンブリッジ帰納主義者 Cambridge Inductivists、陰鬱な科学 dismal science、経済学の制度化、自然科学トライポスと道徳科学トライポス、イギリス科学促進協会 the British Association of the Advancement of Science、経済学の数学的定式化

1. はじめに

Scientistという言葉の生みの親として知られるヒューウェル William Whewell (1794-1866) への関心が、近年高まりを見せている。それを象徴する出来事は、21世紀最初の年における

史上初めてのヒューウェル全集 Yeo (2001) の刊行であった。もちろん、この全集は膨大なヒューウェルの著作のすべてを収録したものではないが、科学史・科学方法論・機械学から、道徳哲学・大学教育論さらには経済学 political economy に関する彼の主要な著作を収録している点において、今後のヒューウェル研究の総合的な発展を期待させるものであると言える。

そもそも、ヒューウェル再評価の機運は、1960年代以降科学史研究における“相対主義アプローチ”の流れが遠因となっている。科学知の漸次的な拡大として科学の進歩を捉える素朴な科学史観を退け、科学を社会に内在したものとみなすこのアプローチが、前期ヴィクトリア朝のイギリス社会を見やる時、ヒューウェルを「発見」することはある意味で当然であった。彼は、ケンブリッジ大学の鉱物学 (1828-) および道徳哲学 (1838-) 教授であり、トリニティ・カレッジの学寮長 (1841-) であり、イギリス科学促進協会 the British Association of the Advancement of Science (BAAS) の会長 (1841-) であり、国王任命の首相顧問であった。彼は、沈滞していたケンブリッジ大学に数学教育を楨杆として刷新をもたらし、道徳科学トライポスと自然科学トライポスの新設 (1851) に尽力し、ケンブリッジにおける知的ネットワークの中心的存在であり続けた。

1990年代前半に相次いで公刊された Fisch & Schaffer (1991) および Yeo (1993) は、そのような流れの一つの到達点であった。前者は、彼の様々な側面を取り結ぶことによって総合的なヒューウェル像を描き出そうという大部の論文集であり、後者は、彼の科学哲学と道徳哲学の関係を軸に、前期ヴィクトリア朝イギリスにおける科学のありかたを考察しようとする野心的な試みであった。現在ではともに、ヒューウェル研究における参考文献として第一に挙げられるものとなっている¹。

さて、上のような科学史上のヒューウェル再評価は、経済学史上のヒューウェル研究に影響を与えずにはおこななかった。実際、経済学方法論のコンテクストにおいてヒューウェルは再三言及されるようになっていったのである。これは、現代経済学における特定の学派の史的起源を探るといった旧態依然とした経済学史研究に代わって、科学史の一分野として経済学史研究は行われるべきであるという、経済学史研究の新たな方向性²によってさらに強められているように思われる。

経済学の歴史を科学史の一分野として考察するという試みは、以前から皆無であったわけではないが、1990年代から本格化してきた。この方向での経済学史研究を唱道する Shabas (2002) によれば、その嚆矢が Mirowski (1994) であった。経済学史プロパーだけでなく複数の著名な科学史家が論説を寄せているこの論文集では、科学史の一分野としての経済学史研究のさまざまな方向性が示唆されているが、なかでも注目し得るもののひとつが Henderson (1994) であった。彼は、BAAS における経済科学・統計学部会 (F 部会) の歴史を考察することで、19世紀イギリスにおける諸科学に占める経済学の位置を探り、経済学史と科学史とを制度論的な方向で接合しようとする試みを示したのである。

彼のこのような試みは、その数年後 Henderson (1996) として結実した。彼は、以前よりヒューウェルの経済理論史における貢献の解明に力を注いできたのであったが、前述の論文では、ヒューウェルを BAAS における経済学の制度化への貢献という観点から考察した。Henderson (1996) は、これら二方向の研究成果を融合させ、ヒューウェル像をこれまでの経済学史諸研究のどれよりも総体的に描き出し、それによってリカードウ David Ricardo (1772-1823) 以降のイギリス経済学を取り巻く知的状況の一断面をうまく浮き上がらせているように思われる。

本稿では、以上のような経済学史研究の動向に留意しながら、ヒューウェル研究の最近——主に1990年前後以降——の研究動向を展望することを目的とする。諸研究がヒューウェルを取り上げるコンテクストは、方法論・道徳哲学・制度論・経済理論など多岐にわたっているが、Henderson (1996) を導きの糸としながら、それらをできるだけ有機的に結び、リカードウ以後のイギリス経済学の諸相を鳥瞰する視座の足がかりを得たい。

2. ヒューウェルの経済学方法論

経済学史上ヒューウェルがもっとも頻繁に言及されるコンテクストの一つが、方法論のそれである。彼の経済学について論説のいずれもが、リカードウやミル父子 James Mill (1773-1836) & John S. Mill (1806-1873) の経済学——ヒューウェルのいう正統派経済学——をその方法論的欠点ゆえに論難していたことからすると、これはもっともなことである。

実際、彼の論説だけでなく書簡を見ても、正統派経済学を批判した理由がその方法論的な誤謬ゆえであるのは明らかである。彼によれば、正統派経済学は極めて限定的な仮定にその根拠を置き、その仮定からおざなりな演繹を行って結論を引き出している。そのような誤謬に至ったのは根本的にはその仮定の恣意性にあり、それは事実の観察・蒐集が不十分なことに起因する。経済学のような新興科学にとって——実際、ニュートン科学以外の全ての科学にとって——上の方法は時期尚早なのであり、現在なすべきことはまず第一に事実の観察・蒐集、それらから原理を帰納的に導き出すことである。

Henderson (1990) は、ケンブリッジの人的ネットワークの中心にあったヒューウェルこそが、上のような方法論にもとづくリサーチ・プログラムを強力に推進したのだと主張する。彼は、ヒューウェル、ハーシェル John Herschel (1792-1871)、バベッジ Charles Babbage (1791-1871)、ジョーンズ Richard Jones (1790-1855) など、演繹よりも帰納を重視したケンブリッジの卒業生からなる一群の人々たちを一定の方向性をもった研究者集団として析出し、これと正統派経済学とを対照させている。

この枠組を例証するもののひとつが、経済学研究における盟友ジョーンズとの共闘関係であった。正統派経済学の排撃を目指すヒューウェルは、正統派経済学の演繹手続きにおける誤謬を指摘することを数学者としての自らの役割であるとした上で、ジョーンズに帰納主義

方法論にもとづく経済学の創始を促した。ジョーンズの『地代論』が公刊された直後には、ヒューウェルはその書評論文のなかで、『地代論』こそ帰納主義方法論にもとづく正しい経済学の始まりであると主張するほどであった。

上のような事実を根拠として、リカードウに代表される正統派経済学 vs. ケンブリッジ帰納主義者 Cambridge Inductivist Group という図式でもってこの時代の経済学方法論史をまとめようとする研究は、実は、新しいものではない⁴。古くは、Checkland (1951) や De Marchi & Sturges (1973) がそうであった。また本邦でも馬渡 (1990) がこの枠組の有効性に基本的に同意している。

しかし、この枠組はいくつかの事実をうまく説明できない。第一に、ヒューウェルの科学方法論は単純な帰納主義ではないということである。彼は、観察・蒐集された事実から原理を帰納する際に直感の果たす役割を重視し、観察・蒐集そのものをさほど重視はしていなかった。科学方法論史上、ハーシェルや J.S. ミルがイギリス経験論の嫡流に位置づけられるのに対して、彼はむしろドイツ観念論——具体的には、カント——の影響を受けた異端的な存在として扱われることが多い所以である⁵。第二は、彼が1831年頃からジョーンズとの共闘関係に以前ほど熱心ではなくなっていたという事実である。ジョーンズは、帰納主義にもとづく経済学を促進・普及させるための雑誌 Review を創刊し、これに経済学の重鎮マルサス Robert Malthus (1766-1834) に寄稿をしてもらうなどして権威ある雑誌に成長させ、これを拠点として帰納主義的経済学派を形成することを目論んでいた。これに対してヒューウェルは、1831年以降時が経つにつれてジョーンズの立場に懐疑的な態度をとるようになっていった。

上のような事実を鑑みて、すでにかなり以前に Hollander (1983) が、ヒューウェルは1830年代に経済学方法論における素朴な帰納主義者から演繹主義者へと転向したという仮説を提出していた。それ以降のヒューウェルのジョーンズ礼賛はリップサービス以外の何ものでもなく、その意味で正統派経済学と彼の方法論上の差異はなんら存しないというのが、彼の主張である。また Redman (1997) や佐々木 (2001) は、この時代の経済学の方法に関する対立を「演繹主義 vs. 帰納主義」という図式で語ることは、リカードウとマルサスとの方法的対立の誤った解釈に起因しており、このような枠組自体が不毛であると論じている。これに対して、Henderson (1996:176n.) は、ジョーンズに対するヒューウェルの冷淡なもしくは懐疑的な態度を、シーニア Nassau W. Senior (1790-1864) やホイイトリー Richard Whately (1787-1863) の方法論に対するジョーンズの譲歩がもたらしたものとし、ヒューウェルの方法的立場は一貫していたと主張した上で、「帰納主義 vs. 演繹主義」という枠組を固持するのである。

しかしながら、科学史の側からするヒューウェル研究——例えば Fisch (1991)——に鑑みれば、1830年代前半は、素朴な帰納主義からヒューウェル独自のものへの科学哲学の深化の時期であることから、この過程で、ジョーンズの主張する経済学における観察事実の集積

という帰納主義リサーチ・プログラムに対してヒューウェルの懐疑が増していったという解釈のほうが、ずっと説得的であるように思われる。現在のところ、ヒューウェルの科学哲学と経済学方法論との関係を時系列的に検討した研究は存在せず、この方向での研究の進捗が強く望まれる。まして、Yeo (1993) の指摘するように、経済学へ自らの科学方法論を適用することが科学に対する敵意から科学を救い出すために必要であるとヒューウェルが考えていたとすれば、なおのこと望まれよう。

3. 神学的弁証論から正統派経済学批判へ

ヒューウェルは自らの科学方法論の深化にともない、正統派経済学への批判をやめてしまったわけではない。むしろ、正統派経済学への批判という点においては、ヒューウェルは生涯一貫していたように思われる。実際、経済学における拙速な演繹主義の適用に対しては一貫して批判的であったし、正統派経済学の提示する“陰鬱な”帰結についても終生違和感を隠さなかった。この点について、Henderson (1996:ch.3) は、ヒューウェルの神学的立場やそれにもとづく道德哲学がその批判の根底にあったのだと主張している。だとすれば、彼の正統派経済学批判は、ただ彼の科学方法論のみに還元されるべきではなく、その神学的コンテクストを考察することが不可欠となるであろう。

ところで、19世紀の経済思想を神学的コンテクストを意識して描くという諸研究が、近年相次いで現れている。たとえば、Hilton (1988) は、19世紀前半トーリー党によって主導された自由主義的な経済政策は、自由主義経済学だけでなく、いやそれ以上に福音派神学によって支えられていたと主張した。また、Waterman (1991) によれば、19世紀前半イギリスの神学者たちにとって、神学と経済学とをいかに調停させるかは大きなテーマであったという。この一群の神学者はコールリッジ Samuel T. Coleridge (1772-1834) やカーライル Thamas Carlyle (1795-1881) らのロマン主義の系譜から区別される、アングリカン体制の側から経済学の言説に対応しようとしたグループであったという。彼はヒューウェルを直接扱ってはいないが、この指摘はヒューウェルを考察する上できわめて示唆に富んだものだと思われる。

さて Henderson (1998) によれば、ヒューウェルの正統派経済学批判の根底には、リカードウの経済成長モデルが提示する帰結への敵意があった。ここでいうリカードウの経済成長モデルは、極度に単純化しているならば以下のようなものである。人口成長および資本蓄積が同率で進行する斉一的な成長経路に経済があるとする。人口成長にともなう農業生産物に対する需要増大により、農業生産が拡大されるが、新たに耕作に引き入れられた土地——土地面積あたり以前と同量の労働と資本が投下される——では、収穫逡減の法則により土地面積あたりの収穫は以前の耕境のそれよりも減少する。耕境において地代は生じないので、収穫逡減にともない利潤率が低下し、これが資本蓄積率の低下をもたらす。他方、この過程で

実質賃金は生存費レベルへと低落する傾向をいっそう強め、結果として人口成長率も資本蓄積率同様に低下していくことになる。この必然的帰結は経済成長率も同様に低下することであり、おそかれはやかれそれはゼロ・パーセントとなるが、このとき経済は定常状態を迎えるのである。

ヒューウェルは、この経済成長モデルは、第一にマルサスの人口原理の誤ったリカードウの解釈、第二にリカードウの誤った地代理論、第三にリカードウの誤った価値理論——投下労働価値説——から導き出されていると判断した。ヒューウェルからすれば、それが導き出す経済観はきわめて陰鬱なものであった。彼の神学的立場からすれば、諸階級の利益相反、地主階級の利益と社会全体の利益の相反、社会の進歩に対する否定的な判断は、全く受け入れられるものではなかった。Henderson (1998) は、ヒューウェルのこのような態度を、反功利主義・反急進主義・反無神論というヒューウェルの理念につながるものと解釈している。

Henderson (1998) によれば、ヒューウェルは、神は社会的調和をもたらすはずの社会的欲望や感情を人類に与えていると信じていた。自然は、文明の技術と私的所有権の制度を媒介にして、農業部門に恵み——剰余——を生み出す。この剰余が社会に階級的不平等をもたらすが、人類の社交欲のおかげで——社会的分業を通じての相互理解を通じて——階級間の不和とはならない。むしろ、この階級的不平等は、社会の然るべきヒエラルキーを表現しているという点で肯定されるべきものである。

しかし、ヒューウェルのリカードウの経済成長論に対する異論はこれだけではない。さらに特徴的な点は、ヒューウェルが経済成長の源泉を人口成長や資本蓄積よりもむしろ技術進歩に見ていたという点である⁶。確かに、経済成長の過程において短期的には実質賃金低下が見られるが、しかしこれは、農業部門における労働節約的な新技術の導入によって労働需要が減退したためであって、実質賃金が生存費レベルに引き寄せられるという原理——リカードウの誤った解釈にもとづくマルサス人口原理——の発動ではない。また長期的に見れば、このような農業部門における労働需要減退は賃金の低下を相殺してあまりある効果を経済社会にもたらす。第一に、人口の重心を農村から都市へと移動させ、それまで家計内部で生産されていた財が商品化され、この財の生産部門が新たに労働を需要するようになる。第二に、このような社会的分業の深化にともなって、金融・商業・運輸等が発達し産業構造がサービス化することにより、労働者階級内部にヨリ多様な階層スペクトラムを生み出す。このような経済社会構造は、社会の繁栄と安定に寄与するという点において、擁護すべきものなのである。

Henderson (1998 & 1996:ch4) によって描かれるこのようなヒューウェルの経済社会観は、アングリカン体制の側からする経済社会認識にきわめて適合的なものである。Hilton (1988) は、ヒューウェルを含むオックスブリッジの人々の経済社会認識を、キリスト教的弁証論 apologetics、自然神学としての経済学と特徴づけたが、このような特徴付けはヒューウェルにも実によく当てはまる。また、深貝 (2000) の言うように、19世紀前半にあって神

学サイドからの経済学へのアプローチには、第一に、利己心や私有財産制にもとづく商業行為一般をいかに肯定するか、第二に、商業社会をキリスト教的な文明史のもとでどのように位置づけるか、第三に、マルサス人口原理との関連でどの点に神の恩寵を見出し、貧困問題をどのように扱うか、第四に、経済学についての科学的知識を神学的知識との関係でいかに位置づけるか、という四つの問題領域が存在したとすれば、上のヒューウェルの議論はそのいずれの問題領域にも少なからずコミットしていることが了解されるであろう。これらのことからすれば、ヘイトリーやシーニアなどのオクソニアンたち Oxonians、ジョーンズやバベッジ、さらにはマルサスなどのカンタブリッジアンたち Cantabrigians との異同を明らかにすることで、このコンテキストにおけるヒューウェルの立ち位置を同定する作業が強く望まれる⁷。

このような方向の研究の進展は、さらにまた、それに付随して古くからの経済学史上の問題領域に光を当てることになるであろう。それは、1830年代にリカードウ経済学の衰退はあったのかどうか、あったとすればそれはいかなる事情によるのか、というものである。この点に関して最近では、Coleman (2002:ch.6-7) が、その機械論的哲学に対する反自由主義的なモラリストの攻撃にもかかわらず、リカードウ経済学は正統であり続けたとする見方を示唆した。また Levy (2001:part 1) は、カーライルの「陰鬱な科学」なる用語は、正しい階層秩序を前提とせず、市場法則によってもものごとが決まるといふ経済学の原理そのものに対してむけられたものだと主張し、「マルサス人口原理にもとづくリカードウ経済学=陰鬱な科学」という通念に一撃を加えた。もし、ヒューウェルがジョーンズやバベッジとともに、神学的立場からの経済学へのアプローチをケンブリッジを拠点として展開していたとすれば、リカードウ経済学へ敵意のさらにもう一つのうねりをここに見て取ることもできよう。

4. 統派経済学批判の拠点としての制度

井上 (1988) は、経済学の制度化の研究は、1820年代から中葉にかけてのイギリス経済学の状況を明らかにするために不可欠なものだと主張する。なぜなら、この時期は、アマチュアリズムに支えられて生成・発展・普及してきた経済学が衰退する時期であり、それに代わって進行ししつたあった経済学の専門化・制度化の過程が、しだいに経済学それ自体の変容を促しつつあったからである。たとえば、この時期に経済学は、オックスブリッジに講座を獲得しただけでなく、西岡・近藤 (2002:ch.5) によれば、1840年代後半以降両大学の地方試験 local examination を通じて労働者カレッジやメカニック・インスティテュートで学習している人々に経済学を普及させることにきわめて重要な役割を果たしたという。また、民間の科学団体も、この時期の経済学の専門化・制度化の一例である。たとえば、1821年には経済学クラブ Political Economy Club が創設され、1833年には BAAS が F 部会を設置したのである。

このような、大学における経済学の導入と科学団体における経済部会の設置・運営に大きな役割を演じたのがヒューウェルであった。すでにケンブリッジ大学では、1816年からプライム George Pryme (1781-1868) が経済学を講じており、1828年に彼は正式に終身の教授職を獲得していた⁸。これに対して、同年に鉱物学教授、1838年に道德哲学教授、その後、1841年にはトリニティ・カレッジの学寮長に、そして翌年には実質的な大学の運営責任者である副総長 Vice-Chancellor に就任したヒューウェルは、その権力と影響力を行使して、1851年に自然科学トライポスと道德科学トライポスを導入した。Henderson (1996:ch.10) によれば、このことは、大学において経済学の地位を高らしめるのに大きな効果があったという。というのは、トライポスの受験資格として、13名の大学教授のいずれかが行う講義を聴き、その試験に合格していることが必要とされたためである。この13名のなかにプライムが含まれるのは言うまでもない。

しかしながらヒューウェルは、正統派経済学が大学に侵入することに対しては上述の敵意ゆえ断固として反対であった。Henderson (1996:ch.5) が指摘したように、ヒューウェルの経済学に関する論考は、ケンブリッジの学生をして正統派経済学の影響から免れさせることを目的としていた。また、プライムの経済学講義のシラバスは、その講義がヒューウェルやジョーンズの考えに沿って進められており正統派経済学への批判を含んでいることを示しており、この面でもヒューウェルの強い関与を示唆している。さらに、Dimand (1994) によれば、ヒューウェルおよびジョーンズの影響は、マーシャル Alfred Marshall (1842-1924) の学生時代にいたるまで、ケンブリッジ大学における経済学徒の精神を支配したという。これらの指摘は、ヒューウェルの大学内での活動が次世代のカンタブリッジアンによる経済学研究にどのような影響を与えたのかという、古く Checkland (1951) が提起した問題への重要な示唆を与えるものであろう。

他方、大学以外における経済学の制度化の事例である BAAS・F 部会の設置についても、ヒューウェルが強い影響力を行使したと Henderson (1994 & 1996:ch.2) は主張する。井上 (1989) によれば、BAAS における F 部会の設置は正当な手続きを経ないものであった。1833年に開催された BAAS のケンブリッジ大会は、当初、そのプログラムに統計部会の設置は示されていなかったが、バベッジが、自らの社会的地位と学問上の評価を十分に利用し、その大会における部会の設置を既成事実化することによって、時の BAAS 会長であったシジウィック Adam Sedgwick (1785-1873) に黙認させたのであった。従来の研究史では、このようなクーデタ的な F 部会の設置において、バベッジ、ジョーンズ、ケトレー Adolphe Quetelet (1796-1874)、マルサスの果たした役割が強調されてきたが、Henderson (1994 & 1996:ch.2) は彼らの背後でヒューウェルが黒幕的な役割を果たしたと主張するのである。

第一に、ヒューウェルはそのかなり以前から経済学における帰納主義リサーチ・プログラムを遂行するための制度的な拠点を、ジョーンズとともに立ち上げる計画を練っていたこと。第二に、ベルギーにおける社会統計の発展についての報告をしてもらうため、この大会

にケトラーをベルギーから招いたのがヒューウェルであったこと。第三に、大会中に、ヒューウェルがケンブリッジの自室に少数の同志を集め、バベッジを部会設置のスポークスマンとするという方針が定められたこと。これらを根拠として、Henderson (1994 & 1996:ch.2) は、部会設置がヒューウェルの帰納主義リサーチプログラムの制度的実現であったと結論づけるのである。

しかしながら、1941年に BAAS の会長に就任したヒューウェルは、部会設置当時とは違ってかわって、F 部会に対して批判的な態度をとるようになった。Henderson (1994 & 1996:ch.2) は、1834年から1870年までの BAAS の資金配分を検討し、ヒューウェルの会長在職中に急激に F 部会への配分資金が減少しているという事実を明らかにした。彼は、このようなヒューウェルの態度は、F 部会における研究が政策的な提言を性急に追い求めるあまり、本来の科学から逸脱し政治的なことに深入りしすぎているという判断から生じたものと述べている。

だが、F 部会内部では、政治的な諸問題への深入り云々以上に、経済学における統計的手法そのものについて疑問の声が挙がるようになっていた。井上 (1989) によれば、1838年の第 8 回大会では、F 部会におけるデータ収集が、核になる種々の知識や正確な理解なしで行われているために、十分な科学性が確保されていないという趣旨の報告が行われた。実際、この大会での報告論題を見る限り、イギリス各地や世界各地の統計データの紹介が中心となっているようである。1855年までの F 部会では、経済学そのものの研究報告は皆無に等しく、唯一の例外はヒューウェルの「経済学のいくつかの原理の数学的説明について」と題する 1851年の報告であった (井上 1989:466-7)。

上のような事実からすると、Henderson (1994 & 1996:ch.2) の主張するように F 部会の政治性ゆえにヒューウェルが F 部会への批判的な態度を強めていったというよりも、単なる事実の観察・集積に終始している F 部会に対して、上述したような方法論的立場を深化させつつあったヒューウェルがより批判的になっていったと解釈するほうが、むしろ説得的であるように思われる。実際、かなり後 (1860年の第30回大会) になっても、F 部会では「ヒューウェルの経済学方法論」についての報告がなされていることから、F 部会におけるヒューウェルの関わりが、その政治性の有無よりもむしろ、経済学方法論についてであったことが窺えるのである。

5. 正統派経済学の数学的定式化

上述の F 部会でのヒューウェル報告がどのような内容であったかは、現時点では不明である。しかしながら、その報告と同表題の論文をすでに 1829年に発表していたことからすると、井上 (1989) が示唆するように、その論文と類似の内容をもつ報告であったと推定することが可能であろう。

この論文は、経済学における数学的定式化の最初期の試みの一つとして知られるものである。ヒューウェルは、その後も正統派経済学を数学的に定式化する諸論文を著したが、前述のようにその主観的意図はあくまで、正統派経済学が依拠している仮定の恣意性や演繹手続きにおける誤りを明らかにするとともに、それが導き出している結論の非現実性を論難することであった。ヒューウェルは、数学的定式化それ自体は経済学の原理になにも加えるものではないと、考えていた。このような自らの数学的定式化に対する消極的評価は、彼の成し遂げたものがどのようなものであれ、後世の研究者をしてそれをどのように評価してよいか戸惑わせてきたように思われる⁹。

実際、ヒューウェルの主観的意図から一旦離れて、彼の理論的な貢献を特定しようとする問題関心が現れてきたのは、比較的最近1970年代以降のことである。その貢献とは、第一に、需要の価格弾力性の理解にすぐれ、ギッフェン Robert Giffen (1837-1910) に先立ってギッフェン・パラドクスを認識していたこと、第二に、固定資本を日付の付いた労働へ還元し、ボルトキエヴィッチ Ladislaus von Bortkiewicz (1868-1931) に先立って固定資本を数学的に処理する方法を開発していたこと、第三に、国際貿易における交易条件の決定を論じ、J.S. ミルに先立って相互需要説を完成していたこと、である¹⁰。

さらに近年では、これらの諸研究を踏まえ、ヒューウェルの理論的貢献がその後どのような影響力をもったのかという点に焦点が移ってきた。最大の問題は、J.S. ミルの『原理』初版(1848)において国際貿易における交易条件が未決定であったのに対し、第三版では相互需要によって交易条件の決定を論じるという改訂がなされたが、この改訂に対してヒューウェルの理論的貢献——上述の第三の点——がどのように影響を与えたか、というものであった。J.S. ミル自身がこの改訂をソーントン William Thornton (1813-80) の批判に対する対応であったと第六版(1865)で記していたために、係争点がやや混乱したけれども、近年の諸研究 Henderson (1989)・Creedy (1992)・Maneschi (2001) などがヒューウェルの決定的影響を明らかにしてきた。J.S. ミルによるリカードウ経済学の継承のなかに正統派経済学の変容もしくは解体いずれを見るときでも、比較生産費説から相互需要説への理論的推移に大きな役割を果たしたヒューウェルは、理論史上孤立した存在以上の位置づけが与えられて然るべきであろう。

他方で、ヒューウェルの経済学への数学の適用それ自体については、さほど高く評価されてこなかった。ヒューウェルが適用した数学は、微積分を全く使用せず初歩的な代数的表現に終始したためである。Henderson (1996) によれば、ヒューウェルの経済学の諸論考はケンブリッジの学生を主たる読者として想定して書かれたものであるために、代数的表現しか使用されなかったのだという。実際、ロジャース Edward Rogers (1794?-1824)、トムソン Thomas P. Thompson (1783-1869)、トウザー John E. Tozer (1806-77)、ラボック John W. Lubbock (1803-65)、ラードナー Dionysius Lardner (1793-1859) というヒューウェルの周辺にいた人々が、それぞれ経済学への数学の適用を推し進めたが、その意図の不統一からか「学

派」を形成していたとは言い難く、その後イギリス経済学へ与えた影響も限られたものに過ぎなかった。マーシャルがその数学的能力にもかかわらず経済学の数学化に否定的な態度を持ち続け、その後の数理経済学の発展がイギリスよりもむしろ大陸諸国において進行していくことになるという事実を、ケンブリッジの経済学徒の精神を支配したヒューウェルの影響に帰すのはあながち強引でもないであろう¹¹。

おわりに

以上のように多岐にわたるコンテクストにおいてヒューウェル研究を概観してみると、リカードウ以降のイギリス経済学の諸相が現れてくるように思われる。リカードウ経済学に代表される当時の正統派経済学は、1820年代以降、自然科学にも匹敵するようなあまりにも厳密な演繹体系ゆえに、定常状態における階級対立の激化といった経済社会像の陰鬱さゆえに、また、需要要因を攪乱要因として捨象したその非現実性のゆえに、激しい批判に晒されるようになっていった。新たに経済学の専門化・制度化を推し進めていた大学や民間団体において、正統派経済学はさしたる地位を占めることなく、この間隙を縫って新たな経済学の胎動が開始されていった。

1834年1月9日の経済学クラブ会合について、マレット John L. Mallet (1775-1861) は以下のように記している。

「私にもっとも印象的だったことの一つは、マカロック John R. McCulloch (1789-1864) が、十分の一税が産出物の価格に及ぼす影響に関するリカードウの理論を、この著者の軽率な思考の一つだと語ったことであった。私はマカロックがリカードウの忠実で熱烈な弟子であり、その最も有能な解釈者であって、彼のあらゆる見解の擁護者であった時代を思いおこす。学問の進歩と言うべきか！」(Political Economy Club 1921, 6:218. /邦訳163)

イギリス経済学のこの大空位時代をどのように解釈する立場に立とうとも、この時代がイギリス経済学の歴史においてきわめて重要な意味をもつことは疑いを容れない。そして、多岐にわたるコンテクストにおけるヒューウェル像を総合する作業は、このような大空位時代の時代精神を統一的に把握する道の一つであると信じるものである。

注

- 1) 例えば、定評あるインターネット上の哲学事典である Stanford Encyclopedia of Philosophy の Whewell の項目を参照せよ。 <http://plato.stanford.edu/entries/whewell/>
- 2) cf. Shabas (1992)
- 3) ただし、科学史・科学哲学に属する諸研究については、必ずしもサーヴェイが十全ではない。
- 4) Henderson (1990) 自身は「ケンブリッジ帰納主義者」という用語を用いていない。しかし、論文タイトルからも明らかのように、分析枠組としてはこの図式を使っていることは明白である。

- 5) J.S. ミルの方法論形成史の文脈において、ヒューウェルの帰納概念の特殊性を論じたものに、矢島杜夫 (1993) や佐々木 (2001) がある。
- 6) 技術進歩、とくに機械の導入に対するきわめて積極的評価は、ジョーンズやバベッジなどケンブリッジの経済論者に共通する特徴である。
- 7) ホエイトリーについては深貝 (2000) が、ジョーンズについては出雲 (1993) が示唆的である。
- 8) Henderson (1996:Ch.1) によれば、ケンブリッジ大学経済学教授職の設置には、プライム以外に、ハーシェル、シジウィック、トムソン、ヒューウェルに力があつたという。ちなみに、西岡・近藤 (2002:152) によれば、ケンブリッジに先立って設置されたオックスフォード大学経済学教授職 (ドラモンド講座) は、五年間の期限付き任用であつたという。
- 9) ヒューウェルの1850年に著した論文においては、経済学における数学の使用についてやや積極的な評価も見られるようになったが、それでもなお消極的評価のほうがまさっているように思われる。
- 10) 例えば、第一の点については Henderson (1973)、第二の点については Campanelli (1982) 第三の点については Henderson (1989) が挙げられる。また、第一の点と第三の点をともに、交換理論の発展というコンテクストに位置づけたものとして、Creedy (1992) が挙げられる。
- 11) Porta (1983) は、ヒューウェルの経済学諸論考のイタリア語翻訳を通じて、そのイタリア経済学への影響を示唆している。

参考文献

- 出雲雅史. 1993. 「資本認識をめぐるリカードウ後の論争とジョーンズ」平井俊顕・深貝保則編『市場社会の検証—スミスからケインズまで—』ミネルヴァ書房 143-74.
- 井上琢智. 1988. 「イギリス社会科学振興協会と経済学『会報』を中心として」『経済学論究』42/2: 107-32.
- . 1989. 「イギリス科学促進協会F部会の歴史:新設(1833)からイギリス経済学会の創立(1890)まで」『経済学論究』43/2: 459-89.
- 佐々木憲介. 2001. 『経済学方法論の形成:理論と現実の相克1776-1875』北海道大学図書刊行会.
- 西岡幹雄・近藤真司. 2002. 『ヴィクトリア時代の経済像』萌書房.
- 深貝保則. 2000. 「ホエイトリーの文明社会論」中矢俊博・柳田芳伸編『マルサス派の経済学者たち』日本経済評論社 103-35.
- 馬渡尚憲. 1990. 『経済学のメソドロジー:スミスからフリードマンまで』日本評論社.
- 矢島杜夫. 1993. 『ミル『論理学大系』の形成』木鐸社.
- Checkland, Sydney G. 1951. The Advent of Academic Economics in England. *The Manchester School of Economic and Social Studies*, 19/1: 43-70.
- Creedy, John. 1992. *Demand and Exchange in Economic Analysis*. Aldershot: Edward Elgar.
- Coleman, William O. 2002. *Economics and its Enemies: Two Centuries of Anti-Economics*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- De Marchi, Neil. B. & R. P. Sturges. 1973. Malthus and Ricardo's Inductivist Critics: Four Letters to William Whewell. *Economica*, 40: 379-93.
- Dimand, Robert W. Alfred Marshall and the Whewell Group of Mathematical Economics. *The Manchester School of Economic and Social Studies*, 61/4: 439-41.
- Fisch, Menachem. 1991. A Philosopher's Coming of Age: A Study in Erotetic Intellectual History. In Fisch & Schaffer, 1991:31-66.
- Fisch, Menachem & Simon Schaffer. 1991. *William Whewell. A Composite Portrait*. Oxford: Oxford

- University Press.
- Henderson, James P. 1973. William Whewell's Mathematical Statements of Price Flexibility, Demand Elasticity and the Giffen Paradox. *The Manchester School of Economic and Social Studies*, 41/3: 329-42.
- . 1989. Whewell's solution to the reciprocal demand riddle in Mill's "great chapter". *History of Political Economy*, 21/4: 661-677.
- . 1990. Induction, Deduction and the Role of Mathematics: Whewell Group vs. the Ricardian Economists. *Research in the History of Economic Thought and Methodology*, 7: 1-36.
- . 1994. *The Place of Economics in the Hierarchy of the Sciences: Section F from Whewell to Edgeworth*. In Mirowski, 1994: 484-535.
- . 1996. *Early Mathematical Economics: William Whewell and the British Case*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.
- . 1998. The Cambridge Challenge to the Ricardian Analysis of Poverty. *Forum for Social Economics*, 28/1: 23-34.
- Hilton, Boyd. 1988. *The Age of Atonement*. Oxford: Oxford University Press.
- Hollander, Samuel. 1983. William Whewell and John Steart Mill on the Methodology of Political Economy. *Studies in History and Philosophy of Science*, 14/2: 127-68.
- Levy, David M. 2002. *How the Dismal Science got its Name: Classical Economics and the Ur-text of Racial Politics*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Mirowski, Philip, ed. 1994. *Natural Images in Economic Thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Political Economy Club. 1921. *Centenary Volume. Minutes of Proceedings*. London: Macmillan. (藤塚知義. 1973. 『経済学クラブ イギリス経済学の展開』 ミネルヴァ書房.)
- Porta, Pier L. 1983. A Comment on Dr. Campanelli's Article on W. Whewell's Contribution to Economic Analysis. *Rivista Internazionale di Scienze Economiche e Commerciali*, 30/4-5: 393-400.
- Redman, Deborah A. 1997. *The Rise of Political Economy as Science*. Cambridge: The MIT Press.
- Shabas, Margaret. 1992. Breaking Away: History of Economics as History of Science. *History of Political Economy*, 24: 187-203.
- . 2002. Coming Together: History of Economics as History of Science. In *The Future of the History of Economics*, edited by E. Roy Weintraub. Durham and London: Duke University Press.
- Yeo, Richard. 1993. *Defining Science*. Cambridge: Cambridge University Press.
- , ed. 2001. *Collected Works of William Whewell*. 16 vols. Bristol: Thoemmes Press.
- Waterman, A. M. C. 1991. *Revolution, Economics & Religion*. Cambridge: Cambridge University Press.